



Title	「やさしい日本語」からみる多文化共生
Author(s)	宮原, 暁; 栗原, 由加
Citation	GLOCOLブックレット. 2011, 6, p. 43-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48377
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「やさしい日本語」からみる 多文化共生

宮原 暁 大阪大学グローバルコラボレーションセンター

栗原 由加 京都大学

はじめに ——多文化共生における「やさしい日本語」とは

IIでは、「もう一つの日本語」としての「やさしい日本語」がどういうものか、それを必要とする状況がどんなもので、具体的に教育、医療などの現場に生かすためにはどのようなことに気をつければよいのか、演習形式で紹介する。

多言語社会におけるコミュニケーション手段のひとつとしての「やさしい日本語」は、ごく単純化して言えば、日本語を母語としない人にもわかりやすい日本語である。しかし、それはどんな場合にもコミュニケーションできる、万能のコミュニケーション手段というわけではない。「日本語を母語としない人にもわかりやすい日本語」といっても、その使用状況、目的は様々だからである。

庵(2008)によると、「やさしい日本語」には、少なくとも二つの種類のものがある。「やさしい日本語」と言った場合に、真っ先に思い浮かぶのは、佐藤和之氏が提唱する、災害時の情報伝達ツールとしての「やさしい日本語」であろう。災害が発生した際、はじめの「72時間」ということがよく言われる。この期間内に適切に行動できるか否かが最悪の場合、生死に関わるといわれるが、その間、外国人被災者は情報弱者になる可能性が非常に高い。しかし、緊急時に、外国人被災者のためにすべての情報を迅速に翻訳することは不可能である。そのひとつの解決手段として提唱されたのが災害時の外国人用日本語としての「やさしい日本語」である。

佐藤和之氏の災害時の外国人用日本語としての「やさしい日本語」においては、対象者を「日本語能力試験N4(旧3級)程度の外

国人」としている。日本語能力試験N4程度とは、具体的には「友人と待ち合わせ(時間や場所を決める)ができたり、自分のほしいものを説明して買い物ができたりする程度」であり、日常生活に支障のない程度の日本語能力を想定している。

佐藤和之氏は、このような対象者を想定した上で、通常の日本語を「やさしい日本語」に言い換えるための作成ルールを提示し、誰もがこの作成ルールを使用して「やさしい日本語」が使用できるようマニュアル化を行っている。緊急時の外国人用日本語の「やさしさ」とは、「日本語表現がやさしく(簡単に)言い換えられている」「情報弱者に対してやさしい」というニュアンスで解釈できるだろう。

日本人と外国人が共生する社会において使用される言語は、必ずしも日本語のみとは限らない。しかし、使用言語が異なる者どうしの意志伝達方法として、日本語母語話者が、「やさしい日本語」を使えるようになり、またそのことで意思疎通の可能性が広がるのであれば、「やさしい日本語」は、多文化共生社会における伝達ツールのひとつになる可能性がある。

災害時の外国人用日本語としての「やさしい日本語」よりももう少し使用範囲の広いものとして、地域の日本語教育ボランティア教室で教えられる日本語としての「やさしい日本語」もある。庵(2008)は、この「やさしい日本語」が補償教育の側面を強く持ち、多くの場合、外国人に日本語を教えるボランティアによって担われていると指摘している。そこでは、日本語教育の専門知識を持たないボランティアでも使えるように教材や教授法に工夫がみられる。そこで教えられているのが「やさしい日本語」である。

『にほんごこれだけ! 1』(ココ出版)は、こうした「やさしい日本語」のテキストである。このテキストでは、全く日本語ができない学習者(ゼロ初級の学習者)を想定し、学習者とボランティアが「おしゃべり」をするというスタイルで学習を進める。ここで学習する「やさしい日本語」は、従来の教材に比べると、文法項目が限定され、学習内容の負担を軽くした日本語となっている。また、この教材にはイラストがふんだんに使われ、親しみやすいつくりになっている。このような点を見ると、地域型日本語教育としての「やさしい日本語」の「やさしさ」とは、文法項目の軽減という「学習が容易である」という意味でのやさしさ、また、「おしゃべり」をする中での学習という、「学習が楽しい」という意味でのやさしさであ

ろうと解釈できるだろう。

また『にほんごこれだけ! 1』では、学習内容が日常生活をテーマにしたものに特化され、さらに「おしゃべりを楽しく続けるためのコツ」という、ボランティアの姿勢や心構えにも言及している点が興味深い。

多文化共生社会におけるコミュニケーション手段として日本語を使う場合、まず必要なのは日常生活の中で使う表現であり、またそれ以上に、日本語母語話者、外国語母語話者の双方に話をしようという前向きな姿勢も不可欠である。実生活で隣人になる、あるいは職場の同僚になるという場面で日本人と外国人が共生し話をする必要が生じた場合、「やさしい日本語」は、具体的な解決策のひとつを提案するものになるだろう。ここでは、後者の「やさしい日本語」を「多文化社会でのコミュニケーションツールとしてのやさしい日本語」と呼ぶこととし、災害時の外国人用日本語としての「やさしい日本語」、地域型日本語教育としての「やさしい日本語」とあわせてその性格を検討することで、多文化共生社会におけるコミュニケーションのあり方について考えてみたい。

なおIIでの記述は、2009年から大阪大学グローバルコラボレーションセンター(GLOCOL)が実施している「多言語共生社会演習」でのタスクやケーススタディをもとにしている¹。本文において「多文化社会でのコミュニケーションツールとしてのやさしい日本語」のあり方を構想しつつ、適宜、補注などでこの授業の具体的な内容を解説していくことで、将来、大学と社会をつなぐ役割を担うであろう大学院生たちに、どのような学習の機会をもたせるのがよいのか、その方向性を探っていきたい。

異なる視点から考える〔演習1²〕

多文化共生の方策を現実的かつシステムティックに考えるために手始めとなるの

注

1 2010年度「多言語共生社会演習」は、2010年9月13日から16日までの夏季集中期間中、4日間にわたって行われた。この演習は、高度副プログラム「グローバル共生」の必須科目の一つとしてデザインされており、医学系研究科、言語文化研究科、人間科学研究科などの様々な研究科で多様な専門分野の研究を行う11名の大学院生が参加した。

多言語共生社会演習の狙いは、受講生が、授業で学んだ知識を、教育、医療などの現場での実践に生かす方策を模索し提言することである。多言語共生社会演習の受講生の専攻、バックグラウンドは多岐にわたり、学部から大学院へと進学した者もいれば、就業、退職を経験した後大学院に進学した者もいる。本演習では、様々な受講生が既に持っている問題意識、ビジョン、知識を他の受講生と共有することでより広い視野を持てるようになること、また、互いに意見を交換することによって、より現実的な問題解決が可能になる過程を経験することを目的とした。

2 多言語社会演習では、タスク、ケースを用いたグループワークを中心にすえ、ひとつずつのタスク、ケースを経ることに、新たな問題意識を持てるよう工夫した。とりわけ①現状を正確にとらえ、自分自身を当事者として問題の現実的な対策を考えるためには、まず今ここにある問題を、より大きなシステムの中で考えなければならないこと、②問題解決につながる万能の手段はなく、すでに存在している手段もそれぞれの現場に合わせて当事者が変えていかなければならないこと、の二点を受講生たちが自ら実感できるように、教員は、コーディネーターとして、タスクの流れを考え、提示し、必要に応じてアドバイスをする等、受講生の学習をサポートする立場をとった。

は、同じ事柄について、できるだけ多くの人の視点にたって考えてみることである。教育の現場、医療の現場でのコミュニケーションという点では、いきなり外国語の環境に放り出された子どもたち、大人たちがどのような不安を感じ、どのようなサポートが必要だと感じたのかを想像してみることで、「多文化社会でのコミュニケーションツールとしてのやさしい日本語」を必要とする環境がどのようなものか、感覚を得ることができよう。

例えば、次にあげるタスクのように、自分の母語ではない外国語で行われている教室で授業を受けるとしたら、どんなことに気づくだろうか。

タスク1:異なる視点に立つ

(1) 参加者に日本語で以下の指示をする。(講義が日本語ではない言語で行われることは通知しない。)

これから皆さんにおよそ30分間、あるトピックに関する講義を聞いていただきます。講義の後で簡単なテストを行いますので、よく聴いてください。

(2) 参加者が全く聞いたことのない言語で、30分間の講義を行う。

(3) 講義終了後、参加者の間で4、5人のグループをつくらせ、次の指示をだす。

この講義を聴いてみて、皆さんが日本で学ぶ外国人児童生徒の立場に立ったとき、どのようなサポートが必要だと感じましたか、グループでディスカッションしてください。ディスカッションの際には、誰にどのようなサポートをして欲しいのか、「クラスメートに対して」「同じ立場の友人に対して」「両親や家族に対して」「周りの人たち全てに対して」「学校に対して」「先生に対して」「地域の人たちに対して」「クラスメートの保護者に対して」「母国に対して」「日本政府や自治体に対して」「支援団体に対して」というように、サポートをする主体別にまとめてください。

(4) それぞれのグループで感想をだしあったのちに、他のグループともそれを共有し、さらに意見を出し合う。

表1：外国語による授業の感想
～誰にどのようなサポートをしてほしいか～

1	マジョリティーのクラスメートに対して ・「わからない」ということを理解してほしい ・自分の母国の文化を理解してほしい
2	同じ立場の友達に対して ・助けあいたい
3	両親や家族に対して ・相談にのってほしい ・自分が学校で頑張っていることを認めてほしい ・自分が今いる国の生活や言語を教えてください
4	周りの人達すべてに対して ・声をかけてほしい ・特別扱いしないでほしい ・つらい気持ちを聞いてほしい ・誰かにそばにいてほしい ・自分の言語力を把握してほしい
5	学校に対して ・母国語で行われる授業を受けたい ・通訳を入れてほしい ・支援団体と連携をとってほしい ・自分が今いる国の学校文化を教えてください(保護者にも) ・自分が今いる国の言語を教えてください ・学校内に交流室を作ってほしい ・クラス編成を考えてほしい ・英語を少しでも使ってほしい ・休み時間を増やしてほしい ・少人数制にしてほしい ・自分のことを気にかけてほしい
6	先生に対して ・先生に、自分の国の文化、習慣を知ってもらいたい。その上で、自分が今いる国がなぜこのような仕組みになっているのかを教えてください ・質問に丁寧に答えてほしい ・わかりやすく指示してほしい ・自分にもわかるようにテストを作ってほしい ・図、絵、表を多く使ってほしい ・文化理解の授業をしてほしい ・間違えたことに対して寛容でいてほしい ・ボディランゲージを使ってほしい ・ゆっくり話してほしい ・最初に何を学ぶのか説明してほしい
7	地域の人に対して ・自分のような立場の人が参加する交流会があれば参加したい
8	クラスメートの保護者に対して ・親同士のネットワークを作ってほしい
9	母国に対して ・日本のカリキュラムに合った補助教材を作ってほしい
10	日本政府や自治体に対して ・外国人用のふりがな付きのテキストを作ってほしい ・支援団体と学校が連携するようなシステムを作ってほしい ・支援への補助金を出してほしい
11	支援団体に対して ・支援者(高いクオリティー)の教育をしてほしい ・隣に座って通訳してほしい

注

3 大阪大学人間科学研究科グローバル人間学専攻博士後期課程2年の矢元貴美さんにご協力いただき、全く日本語を使わず、フィリピン語のみで30分の授業をしていただいた。受講生には、事前に日本語で「これから行われる講義の最後にテストを行い、本演習の成績とする」と通知したが、講義がフィリピン語のみで行われることは通知しなかった。講義のち、3つのグループに別れてグループワークを行い、各々の感想をまとめ、発表を行った。

表1は、上記のタスクに従って、「多言語社会演習」の受講者たちが、外国語の講義のあとに、どのようなサポートをしてほしいと感じたかについて、ディスカッションをまとめたものである³。講義は、フィリピン人の地理をテーマにフィリピン語で行われた。日本で学ぶ外国人児童生徒たちの視点に立つことで、今まで見えなかったことが、どう見えて来たのだろうか。

今回のタスクでは、他の参加者も全員授業がわかっていないという状況だったので、学ぶ側にもまだ安心感があった。しかし、日本の小中学校で学ぶ多くの外国人児童生徒が経験するように、自分以外の全員がわかっていて、自分だけがわからない状況での苦痛は、それとは比べものにならない。児童生徒たちが感じる「しんどさ」は、想像するだけでもいろいろなものと考えられ、しかも、一様ではない。一人の子どもにとってよいサポートが、他の子どもにとっては煩わしいものとなることも、場合によってはあるのである。

「やさしい日本語」をつくる〔演習2〕

「異なる視点に立つ」ことを頭において、次に、日本国内において外国語を母語とする人に対する言語的なサポートのひとつとして、佐藤和之氏による「やさしい日本語」(弘前大学人文学部社会言語学教室 <http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ1a.htm>)の学校現場への応用について考えてみよう。

災害時の外国人用日本語としての「やさしい日本語」とは、普通の日本語よりも簡単で、外国人にもわかりやすい日本語のことであり、地震などの災害が起きたときに有効なことばである。日本語のレベルは、日本語能力試験N4程度(日常生活ができる程度のレベル)が想定されている。

この「やさしい日本語」の作り方ルールには、次のようなものがある。

- ・ 難しいことばを避け、簡単な語彙を使う。
- ・ 1文を短くして分かち書きにし、文の構造を簡単にする。
- ・ 災害時によく使われることば、知っておいたほうがよいと思われることばはそのまま使う。
- ・ 外来語の使い方に気をつける。

- ・ 漢字の使用量を少なくし、漢字にはルビをふる。
- ・ あいまいな表現は避ける。
- ・ 文末表現はなるべく統一する。

タスク2:「やさしい日本語」をつくる

(1) 参加者に次の指示を与える。

皆さんは、ある小学校で保健室の先生として勤務しています。プールでの水泳授業が始まるのをまえに、「楽しく安全な水泳学習のために」というポスターを作成しようとしています。ポスターは、外国人児童生徒が見てもわかるように、上で紹介した「やさしい日本語」を使ってつくってください。ポスターを作成する際は、小学校低学年の児童にもわかるように、また、日本語母語話者の児童が見ても大きな違和感がないように工夫してください。

(2) 4、5人ずつのグループ分けを行い、「楽しく安全な水泳学習のために」という文章(コラム参照)と模造紙を配布し、はじめにポスターをどのように作成するか話し合わせたあと、実際にポスターを作成させる。

(3) このポスターを作成する際に工夫した点、難しいと感じた点についてグループでディスカッションさせ、「やさしい日本語」を応用する際の留意点についてまとめる。

この演習では、学校などで「やさしい日本語」の作り方のルールを参考にして使った文章を作成するとき、どのような点が問題となるのかを身をもって感じ

楽しく安全な水泳学習のために

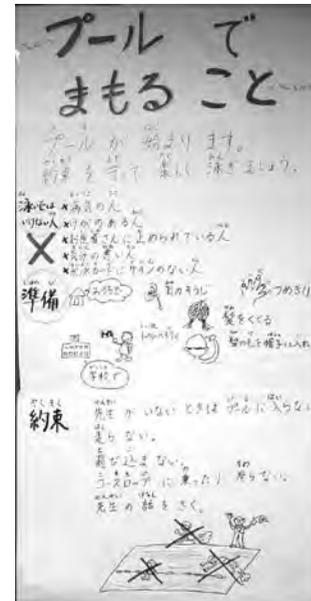
プールでの学習は、とても楽しく、体力作りに役立つ運動ですが、運動場や体育館の運動とちがって体が安定せず、また水着だけなので、水の外で転んだりすると危険です。楽しく安全な水泳学習ができるよう、以下の注意をしっかりと守りましょう。

病気やけがなど、体の調子が悪い人、お医者さんに止められている人、熱のある人、水泳カードにサインのない人は泳げません。家では、耳そうじ、つめきりをし、髪の毛の長い人はくくっててください。また学校では、トイレをすませ、くくっている髪は水泳帽の中に入れます。

先生がいない時にプールに入ることは絶対禁止です。また、プールサイドでは走ってはいけません。プールに飛び込むことも禁止です。プールからあがる合図があったら、近いところからすぐにあがります。コースロープにのったりすわったりしないようにしましょう

こともねらいのひとつとなっている。「多言語共生社会演習」の受講者が作成した掲示ポスターとディスカッションの内容(工夫した点、難しいと感じた)は以下の通りである。

Aグループ



<工夫した点>

- ・ 字の大きさに強弱をつける
- ・ 内容を項目別にする
- ・ 色をつける
- ・ 短い文にする
- ・ 「プールは楽しい」ことを伝える

<難しいと感じた点>

- ・ 要点をいかにまとめるか
- ・ 子どもに必要な情報が否かの判断
- ・ 命令口調にならないよう注意
- ・ 漢字で書くか書かないかの判断
- ・ 最初の段落を採用するか否か
- ・ ビジュアル的なわかりやすさ
- ・ 「コースロープ」をそのまま使うかどうか

Bグループ



<工夫した点>

- ・ 絵に対応する形で文を作る
- ・ 内容を1枚にまとめる
- ・ 「人はZ型に視点を移す」ことに配慮し、レイアウトをZ型に配置
- ・ 「プールには危険がある」ことを教えるという方針

<難しいと感じた点>

- ・ 文末表現をどうするか

Cグループ



<工夫した点>

- ・内容のカテゴリー分け
- ・タイトル
- ・元の文書に書かれていなかった情報でも必要な内容は入れる
- ・単語のレベルを日本語能力試験N4に合わせる
- ・「髪を結ぶ」という表現

<難しいと感じた点>

- ・不自然な日本語になったのではないか
- ・漢字を使うかひらがなを使うか
- ・情報内容が少なくなった(日本人にとっても情報が少ない)
- ・レイアウト、絵の配置をどうするか

ここからもわかるように、実際に災害時の外国人用日本語としての「やさしい日本語」を学校現場などに応用する際には、災害など緊急時の場面とはまた別の困難がつきまとう。災害時用の日本語が、必要最小限の情報の伝達を目的としているのに対して、学校現場、あるいは医療現場では、「やさしい日本語」で必要な情報を余さず伝えられるかが問題となる。複雑な内容をもつものを単純化、簡略化して伝えることと、「やさしい日本語」を用いて余さず伝えることは、似て非なるものである。

また、「やさしい日本語」を使用して文章を作成すると、表現がどうしても不自然にならざるを得ない、という点も指摘できる。もちろん、スキルを磨くことで、この問題はある程度解決できよう。しかし、情報を受ける側が多様である限り、語彙や表現方法の選択には常に困難がつきまとう。

これらの問題は、本章の冒頭で区分した「多文化社会でのコミュニケーションツールとしてのやさしい日本語」と災害時の外国人用日本語としての「やさしい日本語」の分岐点を示唆している。教育現場ではなおさら顕著であるが、現実の多文化社会では、日本語を母語としない人たちの日本語レベルの向上を考慮に入れなければならない。これは、もちろん、無理やり日本語を押しつけるというものではない。むしろ、長年日本に居住することで、日本語を母語としない人たちの日本語レベルは、ごく自然に向上するだろうし、彼ら彼女ら自身もレベルの向上に意欲的であることが多い。「多文化社会でのコミュニケーションツールとしてのやさしい日本語」は、災害時の外国人用日本語としての「やさしい日本語」を出発点とすることは正しいとしても、日本語を母語としない人たちが新たな日本語の語彙や表現を学ぶ道を閉ざすものであってはならない。日本語を第2、第3の言語として学ぶ人にとって、日本語をさらに深めていく道をいかに確保しておけるかという点が、災害時用を越えるもうひとつの「やさしい日本語」に課せられた課題なのである。

恐らくここで慌てて付言しておかなければならないのは、ダイレクト・メソッドによる日本語習得だけでは不十分だということである。もちろん、日本語学習者のなかには、日本語の環境に浸ることで特段努力をしなくても、いわば武者修行的に流暢な日本語をものにすることができる人もいるであろう。しかし、とりわけ学齢期の途中で来日した子どもたちにとって、よくデザインされた「多文化社会でのコミュニケーションツールとしてのやさしい日本語」は、教科学習でのハンディをなくす意味を持つ。日本語を母語としない子どもたちが学ぶ学校を訪れてみると、流暢な日本語で友人と冗談をかわす子どもたちに出会うが、この同じ子どもたちが、授業中、教師の話す日本語が全くわからないと訴えていることは、重く受け止めるべきであろう。

コミュニケーションツールとしての「やさしい日本語」〔演習3〕

ここでは『にほんごこれだけ! 1』(ココ出版)を材料に、〔演習2〕で問題提起した「多文化社会でのコミュニケーションツールとしてのやさしい日本語」のあり方を検討していこう。

地域のボランティアなど、日本語教育の専門家によらない日本語教育では、日本語を母語とする話者と母語としない話者との日常生活の場面での「おしゃべり」を教育の主眼に置くという方法がある。そこで使用される日本語の教材は、日本語を母語としない話者が全く日本語ができないゼロ初級であること、また、日本語を母語とする話者も日本語教育の専門家ではないことが想定されている。

タスク3:『にほんごこれだけ! 1』を用いた「おしゃべり」

- (1) 参加者は2人一組のペアになり、一人は日本語母語話者、もう一人は日本語が全くわからないという役割を与える。
- (2) 『にほんごこれだけ! 1』の「1 おなか が すきました」をテーマとした単元をもとに、15分程度、「おしゃべり」をする。
- (3) 15分の「おしゃべり」の後、振り返りを行い、母語話者と非母語話者が話す時に必要な工夫や姿勢についてペアで話し合う。

このタスクの目的は、日本語を母語とする話者と母語としない話者との間での「おしゃべり」が可能だというばかりではなく、実は結構楽しいということ、個人個人の創意工夫によってさらに楽しくなることを再発見することにある。

表2に示した「多言語共生社会演習」の参加者たちの振り返りにも示されているように、こうした「おしゃべり」では、双方向的に「相手に何とか伝わるように話す」「相手の話を何とかかわかろうとする」という姿勢が見られる。話の聞き方として、「相手が話しやすいように聞く」という提案が、「実際には難しい」という感想とともに提示されているが、これなどは、日本語を母語とする者どうしの会話においても通用する「おしゃべり」の極意ということができよう⁴。

戦前、日本で編まれた外国語会話帳には、東南アジアなどに侵攻した日本軍が現地の人たちに命令を一方向的に伝えたり、必要な情報を得たり、問いただしたりするためだけに用いられる「軍用会話」が多く含まれている。「止まれ」「手を上げる」「嘘をつくな」「どこの村の者だ」などである。翻って、今日、日本の小中学校で学ぶ外国人児童生徒のなかには、私たちが想像する以上に、日

注
4 『日本語これだけ!』には、次のようなおしゃべりを楽しく続けるためのコツが紹介されている。
ポイント1: 心構え
ポイント2: 聞き上手になること
ポイント3: やさしい日本語を話すこと
ポイント4: 使えるものは何でも使う

表2: 母語話者と非母語話者が話すときに必要な工夫や姿勢

1	態度、心構え ・お互いに歩み寄る ・相手に関心を持つ ・非母語話者にも、話の内容を察したり、話に関心を持ったりする姿勢が必要 ・繰り返して話す
2	聞き方 ・相手が話しやすいように聞く(実際は難しい)
3	日本語 ・非母語話者が話せる日本語を記録しておく ・抽象的な概念を簡単に話すのが難しい ・達成感が大切
4	その他技術 ・ジェスチャーを使う ・媒介語を使う ・絵を使う ・資料を使う ・事前の準備が必要(語彙ぐらいは準備して行く) ・相手のレベルを考える

注

5 江野澤恒、ラファエル・アキノ『日・英・タガログ語会話辞典』岡倉書店、1942年では、第7篇が「軍用会話」(151-190頁)にあてられている。そこには、訊問、斥候、宿営準備、宣撫などの項目に区分され、会話が収録されている。

本語の学習に苦痛を感じている児童生徒がいる。「教える」「教えられる」という関係には、「命令する」「命令される」、「問いただす」「詰問される」といった関係が忍び込んでしまうのである⁵。

多文化共生のためのコミュニケーションツールとしての「やさしい日本語」は、単に「教える」「教えられる」といった内容ではない。むしろ、それは「どうすれば伝わるのか」「どうすればわかるか」という配慮と、「教える」「教えられる」という深みの間に構想されるべきものなのである。

外国人へのサポート体制のデザイン〔演習4〕

ここでは、これまで学んできた多文化社会におけるコミュニケーションを十分に意識しつつ、外国人へのサポート体制全般について、関係者の思いと可能な対策に焦点を絞って考えてみたい。その際、問題の本質を個人の能力や資質のせいにするのではなく、システムの問題ととらえ、できるだけ多くの人の立場から問題点、解決方法を検討することを目指す。

タスク4: 可能なサポート体制に向けて

- (1) 参加者には、下記に示したケースをじっくり読んで分析するように指示する。

私は、インドネシア人の介護士です。去年11月に来日し、現在、特別養護老人ホームで働いています。最近、少しずつ日本語もできるようになり、仕事にも慣れて頑張っているのですが、ひとつ気になっていることがあります。それは、私のリーダーが、私に仕事を頼むときに、必ず「復唱して」と言うことです。そのように言われると、プレッシャーを感じます。私だけがそのように言われているのかな、と思うと落ち込みます。

(2) 参加者を4、5人ずつのグループに分け、①このケースの関係者がどのように感じていると予測できるか、②このケースに現れている問題にはどのような対策が考えられるか、の二点についてディスカッションを行う。

表3、表4は、「多言語共生社会演習」の参加者によるディスカッションのまとめである。ここでは、仕事や職場環境に対して、インドネシア人の介護士本人、上司、同僚がそれぞれ異なった認識を持っていることがまず浮き彫りになる。彼ら彼女らは、互いにコミュニケーションに対する不安や戸惑いを感じ、相手に対する配慮をにじませながらも、相手の立場に立ちきれておらず、自分の流儀で問題を解決しようとしている、と予想される。そうした感情は、「こんなに相手を気遣っているのに、なかなか相手はそれに応えてくれない」というものに非常に近いと言わざるを得ない。

表3: このケースに関連する人達が感じていると予測できること

1	本人
	<ul style="list-style-type: none"> 感情面 <ul style="list-style-type: none"> 怒られた、厳しい、こわい、悲しい、恥ずかしい、みじめ、つらい、くやしい、不安 リーダーの指導に対する受け取り方 <ul style="list-style-type: none"> どうして復唱しなければならないのかわからない 自分だけが注意されている、悪い意味で特別視されている 人種差別ではないか、馬鹿にされている、見下されている、過小評価だ 自分は同僚よりも劣っているのだろうか、認めてもらいたい リーダーは自分と働くことを不安に思っているのだろうか 現在の職場環境に対する悩み <ul style="list-style-type: none"> 反論できない、同僚に相談したい 仕事へのモチベーション <ul style="list-style-type: none"> プライドが傷つく、入所者との信頼関係が崩れるのが心配 仕事へのやりがいなくなる

2	リーダー
	<ul style="list-style-type: none"> 責任感 <ul style="list-style-type: none"> これは仕事である、教育の一環だ、当たり前なことだ 安全のために必要なことだ、確認のためだ、明示的に言う方がよい 職場の仕事のルールをしっかり教えたい リーダーとしての責任を果たしている 現状に対する認識 <ul style="list-style-type: none"> うまくやっている、まあ、そのうち慣れるだろう 何かあれば相談してくるだろう インドネシア人の同僚を信頼して、他の同僚と同じように仕事を任せている 親切心 <ul style="list-style-type: none"> インドネシア人の同僚に頑張ってもらいたい (ことばにはしないが)よく頑張っていると思っている 心配だ、かわいそうだ 現在の職場環境に対する悩み <ul style="list-style-type: none"> いちいち面倒だ、自分に何ができるのか悩む インドネシアの文化、社会がわからない
3	同僚
	<ul style="list-style-type: none"> 評価 <ul style="list-style-type: none"> リーダーは熱心、インドネシア人の同僚は謙虚だ 不満 <ul style="list-style-type: none"> リーダーはインドネシア人の同僚を子ども扱いしているのではないか インドネシア人同僚への特別な指導は時間ももたない 私の方がスキルが低いのに、どうして私には特別な指導してくれないのか 現在の職場環境に対する悩み <ul style="list-style-type: none"> もっとインドネシア人の同僚のことを知りたい 外国人の同僚に慣れていないので、どう接してよいかわからない

表4: 考えられる対策

1	本人
	<ul style="list-style-type: none"> 同僚とも思いを話してみる(同僚との関わりを増やす) 人に相談する 日本語と専門の勉強をする
2	介護士
	<ul style="list-style-type: none"> スキルアップのために集まる
3	インドネシア人介護士
	<ul style="list-style-type: none"> 集まって思いを話す 経験談を話す ネットワークを作り、情報共有する
4	同僚
	<ul style="list-style-type: none"> 初めのうちは必要以上に声をかけてみる(積極的にコミュニケーションをとる) 自分の気持ちや仕事について語り合う 「ありがとう」「お疲れ様」と言う、伝える 日本の文化(仕事のルール)を教える 気軽に話し合える(外国人が働きやすい)環境を作る

5	リーダー ・新人、部下を高く評価する ・全員に同じ指導を行う(復唱が必要な場合は全員に) ・部下を気にかけて、いたわる ・何か最近思うことや悩んでいることはないか、質問してみる ・部下の意見を聞くようにする ・飲みに行く ・気軽に話し合える(外国人が働きやすい)環境を作る ・仕事のルールをしっかり教える
6	介護を受ける人 ・介護をしてくれる人への評価と感謝の気持ちを表す ・はげます
7	施設長 ・トップダウンで良い雰囲気を作る ・研究者を呼ぶ ・職場の状況を気にかける
8	施設(職場) ・施設全体で業務教育を行う ・日本の新人教育のシステムを全員に説明する ・ふりかえり制を導入する ・相談役を作る ・相談コーナーを作り、カウンセラーを導入する ・(採用者)インドネシア人(外国人)の採用を二人以上にする
9	行政 ・外国人介護士の問題を施設のみでの責任としない ・外国人労働者の受入れ体制を強化する ・継続的な日本語教育を行う ・(地方自治体) 職場の意見を聞く ・(地方自治体) 相談ダイヤルコーナーを作る ・(国) 支援システム(カウンセリングセンター)を設ける ・(国) 相談窓口、調査委員会の設置
10	インドネシア政府 ・来日前に、日本の文化や価値観を教育する
11	研究者 ・セミナーを開く
12	家族 ・相談にのる
13	介護士の職場外の友人 ・情報交換する
14	地域住民 ・知り合いになる
15	マス・メディア ・マイナス志向に偏らない報道を行う

当事者の感情が平行線をたどるなか、本人、上司、同僚がとり得る対応はきわめて限定的である。なかにはその対応をとったばかりに、より関係が悪化するのではと危惧されるものも散見される。この場合、当事者をとりまく関係者が事態に関与したとしても、状況の劇的な改善は期待できない。周囲の関係者が、単に当事者の誰かに加担するだけのことが多いからである。

そのなかでさしあたり有望な対応策は、関係者の連携を図ることであろう。しかし、それとても軋轢が大きな衝突に発展しないようにガス抜きをしている、といった程度のものかも知れない。それでは、当事者がののしり合い、すべての問題を白日に晒す方が、関係の構築には近道とさえ言えそうである。

やや感想じみたことを言えば、このような軋轢の根幹には、どうもしぐさや表情といった、言語化されないものが深く関与しているように思う。外国人の子どもたちに対して、教師はしばしば「反抗的な目つき」や「いやそうな顔」を読み取って「むすっとした顔をするな」と非難してしまうことがある。それは、いくら頭で「文化の違い」による表情の意味の違いを理解していたとしても、また先入見を払拭しようといくら試みても、ネガティブな印象として残ってしまう。

「文化の違い」は、それと意識できる明白な違いよりも、それと意識できないほんの些細な違いの方が、軋轢の原因となりやすい。「いやそうな顔」をした子どもたちは、自ら非を認めていることが多い。言葉では反論の余地がないために、表情だけでささやかな抵抗をしているのである。したがって、こうした場面でほぼ不可避免的に生ずる軋轢を回避するための唯一の方法は、言語化されないものは無視し、言語による説明を丁寧に聞き、また言語による説明を続けるといったものになるろう。「やさしい日本語」が必要とされるのも、このような言語的なコミュニケーションを支えるためである。こうした多文化共生のためのコミュニケーションツールは、日本語を母語としない人たちとの対話を生み出すのみならず、日本語を母語とする人たちの間にも、新たな対話の経路を開くものとなるろう。

「やさしい日本語」の可能性と問題点を多文化共生の場で考える〔演習5〕

ここでは、多文化共生の場を訪れることで実践の場での努力と工夫を知り、実際に「やさしい日本語」を使ってみてその可能性と課題を考える。「多言語共生社会演習」では、外国人児童生徒が学ぶ大阪府内にある3つの小中学校を訪れた。また、医療通訳研究会の協力を得て、外国人から医療通訳の実際について聞き取りを行った。

タスク5: 学校を訪れる⁶

(1) 参加者に以下の指示をだす。

これから外国人児童生徒が学んでいる小中学校を訪問します。訪問では、教育の場であることをよく理解し、引率者の説明をよく聞いて、常識に従って行動してください。外国人児童生徒が日本の小中学校でどのように学んでいるのか、これまで演習を通して考えてきたことを思い出しながら、つぶさに観察してください。教室内の掲示物や部屋のレイアウトなどにも注意を払ってください。先生方へのインタビューでは、教える側の努力や苦勞、工夫していることなどを聞き取ってください。また、学生たちとの対話では、チャンスがあれば「やさしい日本語」を使い、その可能性と課題について考えてください。

(2) 学校への訪問を終えた後、見学した内容をまとめ、参加者が気づいたことを話し合う。

タスク6: 外国人にとっての病院

(1) 日本の病院は、外国人にとってコトバが通じなかったり、システムがわかりづらかったりするため、病気にかかってしまっても、行きづらい場所のひとつである。そうした状況をどうすれば改善できるか、日本に住む外国人への聞き取りを行う。

(2) これまで演習で学んできたことを思い出し、参加者自身がインタビューする内容とインタビューの仕方を考える。

(3) タスク5と同様に、チャンスが

あれば「やさしい日本語」を使い、その可能性と課題について検討する。

(4) インタビューの後、そこで知り得た内容をまとめ、参加者が気づいたことを話し合う。

以下は、「多言語社会演習」の参加者によるディスカッションで出された意見をまとめたものである。

① A中学校

A中学校は、大阪市の「帰国した子どもの教育センター校」に指定されている。見学当日は午前中2時間、日本語・適応指導教室で、来日後3か月から4か月の生徒5名が日本語の形容詞を学習する様子を見学するとともに、多文化スピーチ大会の作文を閲覧した。見学した授業の担当教員の元の担当教科は英語で、約12年の日本語教育の経験がある。

英語や写真を活用する、雑談を積極的に取り入れることで、生徒にとって関心のあるトピックを授業に取り入れるなどの努力や工夫がされていた。生徒にとっての文化や生活のギャップのつらさやしんどさ、それぞれの生徒のバックグラウンドを理解した上でモチベーションを引き出すこと、生徒にとっての楽しみを作ることの難しさを感じた。

② B中学校

B中学校は、大阪市の「帰国した子どもの教育センター校」に指定されており、24名の外国人生徒(ほとんどが中国)が在籍している。授業は午前と午後の二部制で、レベルに合わせたグループ授業が行われている。見学当日は日本語・適応指導教室で日本語を学習する生徒3名の授業と生徒1名の二クラスの授業を見学した。担当教員2名の元の担当科目は英語と理科である。

授業では絵や図、日本語の教科書以外の補助教材が活用されており、媒介語として中国語が用いられることもあった。教室内では日本人の小学生用のポスター教材も使用されていた。連絡帳を用いて各生徒の在籍校と連絡を取り合い、授業終了後には生徒が在籍校に電話連絡を入れている。日本語教室では個人的な相談や進路相談にも対応しており、母語が使えぬ貴重な場とも

注**6 A中学校**

A中学校では、中学校2年生と中学校3年生のフィリピン人5名のための日本語教室を午前中の2時間見学し、その後、指導にあたっておられる先生、校長先生と懇談をした。生徒は、来日して3か月から4か月の中学生で、大阪市内の様々な中学校から参加している。この日の授業は、形容詞(イ形容詞、ナ形容詞)であった。先生との懇談では、ワールドトーク(多文化スピーチ大会)の模様などについてお話を伺った。

B中学校

B中学校は、A中学校と同様に、大阪市内で日本語指導を行ういくつかの中学のうちの一つである。授業は、午前と午後の二部制で、この日は、中国出身の4名の生徒が授業を受けていた。学習レベルに合わせてグループ授業が行われており、中学1年生1名、中学2年生2名からなるグループの授業では、『みんなの日本語』12課、13課の学習を行い、媒介語として中国語を使用していた。もう一つ、中学3年生1名に対する個人授業では、『みんなの日本語』26課、27課を学習しており日本語のみで授業が行われた。

C小学校

C小学校は、全校児童約500人の小学校で、見学したクラスは6年生の30人からなるクラスであった。このクラスで学ぶA君は、2010年2月にフィリピンから来日した。4時間目から下校まで見学した。

外国人にとっての病院(実習)

この実習では、医療通訳研究会代表で、スペイン語通訳人の村松紀子氏の協力により、ペルーから15年前に来日した40代の女性(2児の母)と、ニカラグアから5年前に来日した20代の女性(1児の母)をゲストに迎え、コミュニケーションの実習として「単語当てクイズ」「行政文章をやさしい日本語で説明」「医療現場での問診シミュレーション」を行った。

なっている。

課題としては、便利な補助教材や情報を誰もが利用できることよ(例:ネットでの教材紹介)、学校現場以外の地域の人にもオープンにできるとよい、「日本語教師」ではない教員が日本語教育に関わっていけるような環境が必要であるということが挙げられ、日本人生徒への「個別授業」と同じ位置づけでの外国人生徒への日本語教育の可能性はあるのだろうかという疑問も出た。

③C小学校

C小学校は全校生徒約500人の小学校であり、見学当日は、C小学校で初めての日本語指導が必要な児童である男子児童が在籍する6年生30人のクラスの4時間目から下校までを見学した。在籍クラスが国語の授業であった4時間目には、当該児童はサポーターとともに別室で夏休みの課題(小1レベル)を確認し、給食、そうじ、昼休みはクラスに戻って同級生と過ごした。5時間目は在籍クラスの理科の授業を受け、隣にサポーターが座り、必要に応じて通訳したり「やさしい日本語」で説明を加えたりした。帰りの会では当該児童には特別課題が与えられていた。

国語や算数ではレベルに合った特別授業が行われており、教材選び(夏休みの課題)も工夫されていた。特別席が設置されており、当該児童への対応や言語的な面で配慮するなど担任の先生が努力されていた。クラスの雰囲気や環境にも気が配られており、教室には辞書が常備されていた。小学校の教員全体の理解を得よう工夫もされている。サポーターは、母語と日本語の使い分け、信頼関係作り、生活指導、雰囲気作り、該当児童への対応などで工夫していた。

外国人児童が今後増えた場合にどのように対応すればよいのだろうか、保護者への対応はどのようにしたらよいのだろうかということが、課題として挙げられた。

④外国人にとっての病院(実習)

医療通訳者の方と、ゲストとして15年前に来日した女性、5年前に来日した女性の3名に参加していただき、医療通訳の実習を行った。実習内容は単語当てクイズ、行政文書をやさしい日本語で説明すること、医療現場での問診シミュレーションである。実習してみて発見したこととして、ゲストの二人は聞いて理解できる

が読めないこと、ローマ字は日本語であること、専門用語や医療用語や痛みの表現が難しいこと、通訳を必要とする相手の言葉の癖やよく出る単語をつかむ必要があることが挙げられた。

また、われわれにできることとして、擬態語を使わない、スケールや図を使って説明する、理解しているかどうか確認する、受入の姿勢を持つ、「やさしい日本語」に慣れる、相手の言葉を使うという改善点が挙げられた。

提言を試みる〔演習6〕

これまでに、「やさしい日本語」についての知識と活用方法、課題を多くの視点から捉える方法を知り、見学を通して多言語共生の現場での工夫について学んだ。ここでは各自がテーマを設定し、その現状を検討した上で改善策を考え提言とする試みを行う。

タスク7:多文化共生社会に向けての提言

- (1) 次の三つの要件に沿って、多文化共生社会の実現に向けた提言を行う。
 - ・ 解決の手段として「やさしい日本語」を含めること
 - ・ 日本人、日本社会にもメリットとなる提言であること(これはギブ・アンド・テイクということではなく、提言の実現可能性に関係している。)
 - ・ できる限り多くの参加者、組織を含めたシステムティックな提言であること
- (2) 4、5名のグループごとにテーマを決め、グループワークを通じて提言をまとめる。

以下では、「多言語社会演習」の参加者によるテーマ設定と検討内容を紹介する。

- ① A中学校、B中学校見学グループは「外国人生徒にとって学校を楽しい場にするためには」というテーマを設定した。外国人生徒の現状として、友人との人間関係が難しい、勉強ができない、教科学習への興味関心の低下、言語でのコミュニケーションやトラブルの解決が難しい、環境(文化、食べ物)が違う、能力を発揮できない、といったことが挙げられた。

これらの状況を改善するためには、学校内で外国人生徒に関わる人たちとして、教師は継続的な支援や体験型の授業を実施し、生徒は外国の文化事情を学習したり、友人の良いところを考えたりすることが必要である。また、保護者は家庭での教育を行うことが必要である。関連する組織として、学校は交流の場を作ったり、外国人生徒が自己表現できるイベントや行事を実施すること、PTAは保護者同士の交流の機会を設けること、市町村は学童保育と同じような外国人児童生徒向けの教室を作ったり、カリキュラムを検討することができる。また大学生がイベントや特別授業に協力したり、研究者が調査に協力したり、研究内容や報告を提供したりすることもできると考えられる。

- ② C小学校見学グループは「外国人児童にとって持続可能なサポート体制を作る」というテーマを設定した。外国人児童へのサポート体制の現状として、社会全体の認知度が低い、専門知識や技術のある人が生かされていない、学校としての体制がとれていない、保護者とのコミュニケーションが不足、先生が忙しい、サポーターが少なくその位置づけが明確ではない、といったことが挙げられる。これらの現状を改善するために、サポーターは思いや考えを声に出してアピールすること、教育委員会は教員の数を増やすこと、支援者のポジションを明確にして権限を増やすこと、教師以外の支援担当者(ボランティア、奉仕ではなく仕事をする人)のポジションを作ることが必要である。また大学や専門機関が日本における多様性や世界の情報をわかりやすく提供すること、NPOが地域活動へ住民を巻き込むことや定期的に集会を開くこと、メディアが現状を発信するための映画を製作することもできるだろうと考えられる。
- ③ 「外国人にとっての病院」グループは「外国人の病院への行きづらさを改善するには？」をテーマに設定した。外国人が病院を利用する際の現状として、情報がない(どの病院に行けばいいのかかわからない、どの科に行けばいいのかかわからない)、遠い、アクセスが悪いといった環境面での問題、病気がこわい、人目が気になるといった心理面での問題、うまく

伝えられない、専門用語がわからない、通訳がないといった言語の問題、経済的な負担や時間の制約があるといった問題が挙げられた。これらの現状を改善するために、まず政府(厚生労働省)は多言語表記の促進や、「やさしい日本語」のマニュアルの作成、自治体は市役所のホームページなどへの病院の場所、科、地図、時間の掲載、心理カウンセラー相談(電話)の設置を行う必要がある。病院では通訳士を配置したり、医療用語を多言語にする工夫を行い、医師や看護師は「やさしい日本語」のセミナーに参加する、専門用語を使わず図や写真で説明する、聞く姿勢を持つ、通訳士は医療の知識を身につけることが重要である。患者の所属する組織として、会社が病欠できる環境を作ったり、学校が検診に同伴者を認めたりすることも必要である。患者の身近な人たちができることもある。たとえば家族や友人や地域の人たちは病院に行くよう勧めたり、病院に同伴したり、情報を共有したりすることもできるだろうし、地域の保健師は家庭訪問して患者を病院につなげることもできる。患者本人が抱え込まず、病気を打ち明けることも大事なことである。

3グループのいずれも、受講生がこれまでの経験の中で培ってきた問題意識が、改善策への視点として生かされることとなった。上記内容についての検討をふまえ、各自が自分自身の提言をまとめることも重要であろう。

おわりに

これまで見てきたように、本章でその可能性を模索した「やさしい日本語」には、いくつかの特徴がある⁷。

まずはじめに、「多文化社会でのコミュニケーションツールとしてのやさしい日本語」は、日本語を母語としない人たちにとっても、あまり苦勞せずに学べるものでなければならない。このことは、日本語を母語とする人たちにとっては、むしろ、少し習得に手間がかかっていることを意味している。「やさしい日本語」は、日本語を母語とする人たちが普段話している日本語とは異なり、簡潔にするためのいくつかのルールに従っている。

とは言え、ここでの「やさしい日本語」は、単に難しい事柄を平

注

7 多言語共生社会演習を通じて印象深かったのは、受講生が様々なバックグラウンドを持っていたため、グループワークを通じた受講生同士のディスカッションをレベルの高いものにしていくことである。職場経験のある学生の知識、各専門の知識など、受講生は異なる分野の知識を共有していた。また、タスクを通じて①現状を客観的に捉え、②問題を構造的に解決する、というスタンスで、自らの知識や問題意識を生かした興味深い検討を行っていた。

易な言い方に換えたものではない。語彙や表現は平易でありながらも、自然さや必要な丁寧さと敬語のニュアンスを失わないこと、平易さを出発点としながらも、学習者がより深い表現を学ぶ道が開かれていることが求められているのである。これは外国語に限った話ではないだろうが、新たな表現や語彙の獲得は、人の人生を豊かにしよう。

コミュニケーションという側面で、「もう一つの日本語」としての「やさしい日本語」は、さらに二つの特徴を持っている。ひとつは、それが「教える」「教えられる」という関係ではなく、「どうすれば伝わるのか」「どうすればわかるか」という関係を出発点としているという点である。「多文化社会でのコミュニケーションツールとしてのやさしい日本語」は、「どうすれば伝わるのか」「どうすればわかるか」という配慮と、「教える」「教えられる」という深みの間に構想されるべきものなのである。

また、「やさしい日本語」は、様々な誤解や軋轢のもととなる「文化の違い」を克服するための経路となる。演習4で述べたように、「文化の違い」は「あたり前」だとして言語化されずに処理される、ほんの些細な違いが、実は重大な誤解と軋轢の原因となることが少なくない。「やさしい日本語」は、言語によって丁寧に説明するための道具立てとなるのである。

このように見てくると、「やさしい日本語」は何か定式化されたものというよりは、どうしたら相手が理解できるかということを中心に考えた、想像力に満ちたコミュニケーションのツールであると言える。日本において、こうしたコミュニケーションツールが、どうしても日本語でなければならない理由は二つある。

一つは、日本語とすることで、多文化共生社会を担う担い手の範囲が格段に広がるからである。これまで日本における言語的なバリアフリーは、外国語が堪能な人を配置することによって達成すべきものであると考えられてきた。しかし、こうした言語的なバリアフリーは、母語による言語的な居心地のよさを保証する反面、社会の他の部分との接触を制限してきた。「やさしい日本語」を用いることで、これまでよりも多くの人たちが多文化コミュニケーションに参画することができるようになり、社会全体の多文化化が可能となるのである。

もう一つは、グローバル化した世界と時代は、単一の言語ではなく、複数の言語が共生するべきだからである。グローバル

化した世界のコミュニケーションツールというと、真っ先に英語を想像する読者も少なくないだろう。上述の言語的バリアフリーが外国語による局所的なサービスによって可能になるという発想も、グローバルな言語としての英語という発想とさほど違いはない。ある個人にとって世界は単言語的であるべきだという思い込みがそこには働いている。「多文化共生社会」というコトバは、何もこういう事態を表現するために存在しているのではない。IIでの演習を通して明らかになったように、私たちが暮らす世界は、コミュニケーションによってそれぞれの違いを承認する世界である。そこで日本語でのコミュニケーションを放棄することは、世界から言語的、文化的多様性がまた一つ消えることを意味するだろう。

「やさしい日本語」は難しい。相手に応じて、わかるように伝えるとともに、わからないことへの道標となるように、表現と語彙を工夫しなければならないからである。田辺聖子の小説を楽しみ、寺山修司の随筆に共感し、小林遠紀の短歌がわかる、この辺が当面の目標となろう。われに五月を。

参考文献

- 庵功雄
2008 「「やさしい日本語」をめぐる」『多文化共生社会における日本語教育研究会第4回研究会予稿集』
- 江野澤恒、ラファエル・アキノ
1942 『日・英・タガログ語会話辞典』岡倉書店
- 佐藤和之
2004 「災害時の言語表現を考える」『日本語学』23-10、明治書院
弘前大学人文学部社会言語学研究室
「やさしい日本語」ウェブサイト参照
URL: <http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ1a.htm>
『みんなの日本語』初級I本冊、初級II本冊、スリーエーネットワーク
『にほんごこれだけ! 1』ココ出版

附録 1：多言語共生社会演習の授業の構成

日程		内容	授業の形式
9/13	1	イントロダクション フィリピンの地理に関する講義(フィリピン語で) 講義内容についてのテスト	講義
	2	テーマ:授業で使われる言語が受講者の母語ではない場合、どのようなサポートが必要か	グループワーク
	3	「やさしい日本語」の紹介① 災害時の日本語	講義
	4	「やさしい日本語」の応用① テーマ:小学校のプール授業に関する掲示を作る	グループワーク
9/14	5	テーマ:小学校のプール授業に関する掲示 発表ポイント:工夫した点、難しかった点	発表
	6	「やさしい日本語」の紹介② 「にほんごこれだけ! 1」	講義
	7	「やさしい日本語」の応用② テーマ:ことばが通じない相手とコミュニケーションをとる	グループワーク
	8	ケーススタディ テーマ:日本の医療現場で働く介護士の不安の背景と問題解決の方策とは?	グループワーク
9/15	実践現場の見学		
9/16	9	見学内容のまとめ 「見学内容/工夫されていた点/改善が必要だと感じた点」	グループワーク
	10	見学内容の発表とフィードバック	発表
	11	見学内容の発展と提言 「システムティックな改善策を検討」	グループワーク
提出課題:11回目の授業で検討した改善策をまとめ、提言としてレポートにまとめる。			

附録 2：「多言語社会社会演習」で用いたパワーポイント

多言語共生社会演習
やさしい日本語
2010年9月13日(月)一日目
栗原由加

本日の構成

- ①様々な「やさしい日本語」
- ②災害時の外国人用日本語
- ③「やさしい日本語」実践練習

<ディスカッション①>

「日本語のみで外国人とコミュニケーションするメリットとデメリットは何ですか。」

- ①様々な「やさしい日本語」
- ・ 災害時の外国人用日本語
- ・ 日本語レベルが低くても、何とかそれだけで意思疎通できるように作られた日本語
- ・ フォーリナートーク

<参考> 庵功雄(2008)「「やさしい日本語」をめぐって」『多文化共生社会における日本語教育研究会第4回研究会予稿集』

②災害時の外国人用日本語

- ・ 定義:普通の日本語よりも簡単で、外国人にもわかりやすい日本語のこと。地震などの災害が起きたときに有効なことは。
- 1995年1月の阪神・淡路大震災から得た教訓をもとに考え出された。

<参考>
佐藤和之(弘前大学人文学部)「やさしい日本語」
URL: <http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ1a.htm>

②災害時の外国人用日本語
ー日本語レベルー

<日常生活ができる程度の日本語レベル>
→目安

- JEEES(財団法人 日本国際教育支援協会)
日本語能力試験3級程度
- 初級日本語終了レベル
参考:『みんなの日本語』I II
資料:日本語能力試験3級の文法
問題用紙(3級文字・語彙、読解・文法)

②災害時の外国人用日本語
「やさしい日本語」例(もとの文章)

けさ7時21分頃、東北地方を中心に広い範囲で強い地震がありました。
大きな地震のあとには必ず余震があります。
引き続き厳重に注意してください。
皆さんおちついて行動をお願いします。
ガス臭いようなところがありましたらマッチを擦ったり、
照明のスイッチをつけたり、消したり、ということはありません。
〇〇市は断水や停電となり、市民の生活は麻痺しています。
中心部の雑居ビルが完全に崩れ落ちています。

②災害時の外国人用日本語
「やさしい日本語」例(修正後の文章)

今日 朝 7時21分、東北地方で 大きい 地震がありました。
大きい 地震の あとには 余震くあとからくる地震く
があります。
気をつけて ください。
火を 使わないで ください。
火事に 気をつけて ください。
〇〇市は 水と 電気が 使えません。
地震で 倒れた 建物に 気をつけて ください。

<ディスカッション②>

「7頁、8頁に並んだ文を比較して、やさしい日本語の作り方のルール(ポイント)を考えてください。」

<ディスカッション③>

「やさしい日本語には、どのようなデメリットがあるでしょうか。」

③「やさしい日本語」実践練習

- ・グループで相談し、配布した文書を書き直した「やさしい日本語」案の一つ作ってください。
- ・グループの案を、「保健室前の掲示」として模造紙に書いてください。

集中講義第一日目終了です。
お疲れ様でした。

多言語共生社会演習
やさしい日本語

2010年9月14日(火)二日目
栗原由加

本日の構成

- ①昨日の復習
- ②地域型の日本語教育としての「やさしい日本語」
- ③ケーススタディ

①昨日の復習

<災害時の外国人用日本語>

- ・災害時に、外国人にすばやく情報を伝達するための、わかりやすい日本語。
- ・日本語能力試験3級程度の日本語を使う
- ・言い換えのポイント
 - －ことばの選び方
 - －文の構造
 - －文末表現

①昨日の復習

<災害時の外国人用日本語>

- ・メリット
 - －母語が様々な外国人に同時に情報を伝達できる
 - －迅速に情報を伝達できる
- ・デメリット
 - －相手の外国人にある程度の日本語力が必要
 - －情報を伝達する側にも知識が必要
 - －シチュエーション限定、一方通行の情報伝達

<発表>

昨日作成した、水泳授業の掲示について発表してください。

- ・特に工夫したところ
- ・難しいと感じたところ

②地域型日本語教育としての「やさしい日本語」

<内容>

- ・地域社会で生活する生活者としての外国人を対象とする日本語教育
- ・日本語レベルが低くても、何とかそれだけで意志疎通できるように作られた日本語を学ぶ

<参考> 藤田雄(2008)「「やさしい日本語」をめぐって」『多文化共生社会における日本語教育研究会第4回研究会予稿集』

②地域型日本語教育としての「やさしい日本語」

<地域型日本語教育の担い手>

→ボランティア教室

- ・教える側は日本語教育の専門家ではない
- ・時間的、空間的な制限がある

誰でも参加でき、日本語も習得できる
ような教育内容、方法が必要

②地域型日本語教育としての「やさしい日本語」

<紹介>

庵功雄監修『ほんごこれだけ！』ココ出版

- ・特徴：日本語がまったくできない人向け
テキストを使っておしゃべりする
文法はおしゃべりを通して自然に学ぶ

<ディスカッション③>

- ・このケースの問題点は、どこにあるでしょうか。
- ・このケースには、どのような解決方法が考えられるでしょうか。

集中講義第二日目終了です。
お疲れ様でした。

<タスク>

二人でペアになって、「1 おなか が すきました」
を見ながら、おしゃべりしてみてください。

<ディスカッション①>

おしゃべりを楽しく続けるためには、どのような
工夫が必要だと思いましたか？

<ディスカッション②>

今おしゃべりをしてみて、このような方法のメリッ
ト、デメリットをどのように感じましたか。

③ケーススタディ

私は、インドネシア人の介護士です。去年11月に来
日し、現在、特別養護老人ホームで働いています。
最近、少しずつ日本語もできるようになり、仕事にも
慣れて頑張っているのですが、ひとつ気になってい
ることがあります。それは、私のリーダーが、私に仕
事を頼むときに、必ず「復唱して。」と言うことです。
そのように言われると、プレッシャーを感じます。私
だけがそのように言われているのかな、と思うと落
ち込みます。

附録3：外国人にとっての病院(実習) レポート

(医学系研究科統合保健学専攻修士1年 塩崎由梨さんのレポート)

はじめに

「多言語共生社会演習」3日目に、私は医療通訳の実習に参加した。私を含む4名のグループは、スペイン語の医療通訳研究会(MEDINT)代表の村松紀子さんと、スペイン語を使うゲスト(国籍はペルー、ニカラグア)のお二人に協力してもらい、やさしい日本語を使って、ある単語を説明したり(例: 駅、富士山、心療内科)、行政の文章を分かりやすく日本語に変換して説明をしたりするなど、看護師役として問診をさせて頂いた。

問診が終わった時に、お二人に感想を聞くと、「すごく優しく話をきいてくれた。怒らなかつた」、「前、病院に行った時は、説明が分からないと言うと、とりえず名前だけを書いてと言われ、症状は質問されなかつた」と言われたのが印象的だった。と同時に、同じ医療職として恥ずかしく思った。

また、お二人に共通の意見として、「病院がいくらはやっていて、偉い先生でも、外国人の言う事を聞こうとしない先生の所には二度と行かない。遠くても、私の話を聞いてくれる所へ行く」と強い口調で言っていた事から、日本の病院には外国人に対する姿勢の問題があり、日本人以上に病院は敷居が高く、遠い存在なのだろうかと感じた。

これは私個人の意見だが、外国人に限らず日本人も、軽い病気なら病院にかからなくてもいいと思う。薬局で症状を伝え、薬剤師から見合った薬(以下OTC)を買って、安静に治癒を待てばいい。しかし、OTCで購入できる薬は限られており、治療に効果的ではな

い薬も多い(私はアレルギー・花粉症の研究をしている。医院では第二世代薬を処方するが、OTCでは第一世代薬が主流で、副作用として日中の眠気や睡眠障害がやすい)。また、医師でなければ、自分が軽い病気なのか、病院に入院しなければならない程重い病気なのか、重症度、症状の進行具合を判断できない。従って、急性〇〇状態などと言われて、救急車で運ばれたり手遅れになったりする前に、また医療費が高額になる前に、早期発見・治療を提供したい。このことから、外国人の病院への行きづらさを改善するには何か必要かを考えた。

ワークを通してわかったこと

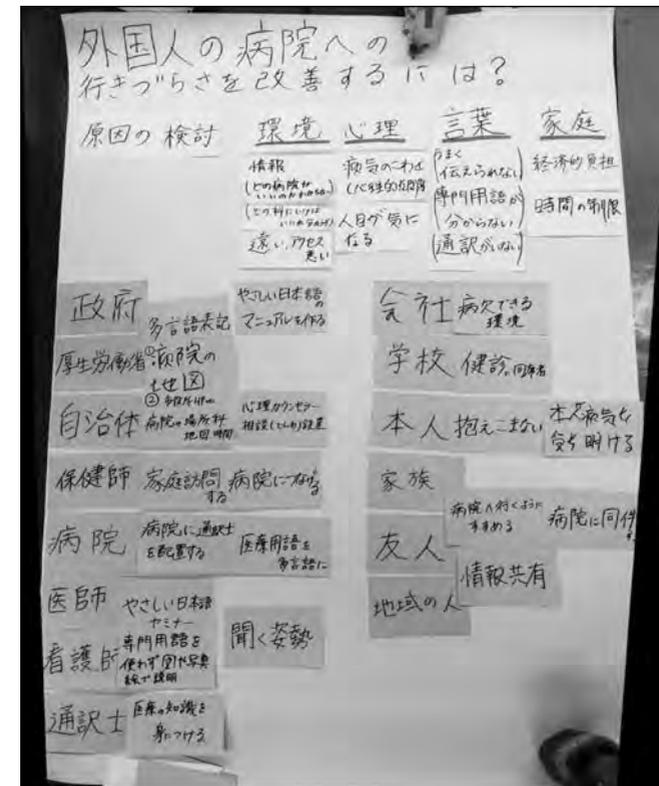
外国人の病院への行きづらさの原因には、①環境、②心理、③言葉の壁、④家庭、個人の問題がある。③以外は、ほぼ国籍を問わず日本人にも言える原因で、詳しく述べると、どの病院・診療科がいいのか分からない、病院へのアクセスが悪い、病院が怖い・不安、待っている間の人目が気になる(これは外国の方限定)、経済的負担、時間の制約がある。③の内容は、自分の症状がうまく伝えられない、医療用語が分からない、通訳がない、である。

確かに私のいた病棟でも、お金がないから働かなければならず、休みが取れないので病院にいけないという方がいた。また、薬を飲まなければ悪くなると理解してはいるが、薬をもらいにいくお金と時間が惜しいから我慢するという方もいた。病院にかかりたいとい

う意志と治療をしたいという気持ちはあっても、通院できない制約があるというのは非常に残念だ。

これを改善していく主体として、私たちは、①本人に近い存在(本人、家族、友人、地域の人々)、②本人の治療に関わる存在(医師、

看護師、保健師、通訳士)、③大きな組織(政府、厚生労働省、自治体、病院、会社、学校)を挙げ、以下、それぞれが実施していくべきことをまとめた。以下、この表について詳しく説明する。



①本人に近い存在

病気を抱える本人に一人で抱えこませないで、家族や友人などのサポーターは病院に同伴すること。それにより、症状をより伝えやす

くなり、自分の母国でない地で病院にかかることに対する不安感が少しでも軽減される。また、地域の人々も医療機関や組織などの専門家や制度に責任を任せきりにせず、一緒に

暮らすコミュニティの員として情報を共有し問題を考える事が望まれる。地域の人の中から民生委員を置いたり、何か困っている事、DVなどの恐れを察知したら、保健師につなぐなど連携を活発にしていこうとよい。

近年、地域のつながりが薄い都会では、隣の人は何をしている人なのか、誰が住んでいるのかが分かりにくくなっている。また、そういうネットワークを自分の生活に干渉しすぎで煩わしいと感じる人が多くなっているのも現状だと思う(実際、病棟で働く時、自分の受け持ちの患者さんを地域の保健師に申し送っても、家庭訪問を拒否されたり居留守を使われたりするケースがあった)。プライバシーの問題もあるのだろうが、今後高齢化が進み、病院にはかかっても地域で病気を抱えて過ごす人の割合が高くなっていく中で、地域主体でつながりの大切さについて考えなければならないと思う。

②本人の治療に関わる存在

やさしい日本語を活用し、専門用語を使わず図や写真・絵で説明する事を医療者に周知すること。お二人に肺炎について説明する時に、咳が長く続く、レントゲンで白く映るという理解された事から、病気の写真や患者さんがよくインフォームドコンセント(以下IC)で目にするようなレントゲンなどの視覚的な媒体があれば、スムーズに話ができると感じた。

またインターネットで調べると、言語は限られているものの、問診票が掲載されている

サイトがあった(<http://www.k-i-a.or.jp/medical/japanese/specialities.html> 2010年9月17日現在)。多言語医療問診票。対応言語:インドネシア語、英語、カンボジア語、スペイン語、タイ語、タガログ語、北京語、ハングル、ベトナム語、ペルシャ語、ポルトガル語、ラオス語、ロシア語、フランス語。診療領域:眼科、外科、産婦人科、歯科、耳鼻咽喉科、小児科、整形外科、内科、脳神経外科、皮膚科)。しかし、精神科が見当たらない。私が問診を外国籍の方に行く時、一番難しかったのは、チクチクなのか、ズキンズキンなのかといった痛みの具合の表現である。また、精神科疾患の症状は抽象的なものが多い(例えば、歩く時にふわふわ浮かんでいるような感じ、電波が膝に飛んできている等、病気の有無で答えにくい症状)。症状の発現の仕方や頻度は国や性別によって大きく異なるが、問診票がなければ、簡単な日本語で説明するのが難しい概念がたくさんある。なお、製薬会社の中には、外国籍の方に配慮している会社もある。日本語でコミュニケーションを取れなくても、相手の言語をカタコトでも話せれば安心感がある(<http://di.mt-pharma.co.jp/foreign/index.html> 2010年9月18日現在。田辺三菱製薬。病院の受付、外来、薬局でのやりとりを多言語で話す会話集)。

また、通院入院に至らない、または病院から地域に戻った市民を把握する方法として保健師の役割が期待されている。勉強不足で保健師がどう関わっているのか分からなかったため、大学に近い箕面市のHPを調べ

てみた。「外国人市民向け」のページには漢字にフリガナがふられていて配慮が感じられたが、一つ先のページに移ると、外国人登録に必要な書類にはフリガナがなく意外と不親切だった。

保健

師が介入できるきっかけとして、子育てをしていけば健診や学校でひっかかるが、子どもがいなくて働いていない主婦や支援を受けていない高齢者はどうやって保健師が把握しているのだろうか。保健師と行政の情報の共有や連携にも、情報格差が見られる。これは今後の私たちの課題だと思う。

箕面市の外国人向けHP: <http://city.minoh.lg.jp/kurashi/gaikokujin/index.html>

東大阪市保健所のHP: <https://ssl.city.minoh.lg.jp/kurashi/gaikokujin/index.html>

東大阪市保健所のHP: <http://www.city.higashiosaka.osaka.jp/110/110010/index2.html>

箕面市医療保健センターのHP: http://www.mmhc.or.jp/minoh_link.html

いずれも2010年9月19日現在。

③大きな組織

私は2年間看護師として働いていたが、その間外国籍の方が入院してくる事は2度あっ

た。京都という外国人観光客が多い土地柄の大きな病院ではあったが、外国人に対するコミュニケーションの院内研修や、入院中の患者さんにICを行う際の通訳の同席はなかった。

私が勤めていた病棟は精神科であったため、措置入院や医療保護入院といった、簡単に言うと、外の生活では自傷・他害のおそれがあるため、隔離し保護するという目的で本人の意志なく入院するケースが多かった。その外国籍の方も、配偶者の許可だけで入院したケースで自分の病識もないため、「閉じ込められた。病気ではない。うちに、国に帰る。」と暴れていた。無理もないと思う。患者さんにとっては病気でもないのに、外国の病院に閉じ込められ、話のできる家族と面会もできず、薬を飲めだの、飲まないなら注射をするなどと言われるのは、恐怖だし、信頼しろという方が難しい。

病状がある程度回復し、自分の置かれている状況を理解しはじめた時には、日本語ではなく、母語で再度ICがなされるべきだと思う。今のところ病院の入院の同意書や説明文書は外国籍の方、日本人でも高齢者には優しくない。漢字ばかりで字も小さい。理解しにくい用語も数多くある。これを病院組織と通訳士が連携して、多言語に対応したり、通訳士にもICの前に事前に病気の説明をする場を設けるなど、入院の前から退院後まで一貫した準備が必要である。これは病院毎に向上させていくべきことでもあり、また厚生労働省などの統括の役割を持つ組織で啓発して

いかなければ浸透しないことだろう。外国籍の方が多い地域の総合病院などをモデル病院として、院内を多言語表記にする、大学と協力してやさしい日本語の講習や、外国籍の患者を対象とした満足度調査を行ってニーズをより抽出するなど、私たち一人一人においてくるような対策が求められていると思う。

すぐに対応できる事としては、パソコン環境にない高齢者や外国籍の方のためにも、駅や道路、バス等の公共交通機関に地域の地図を掲示し、病院がどこにあるかだけでなく、多言語で診療科や診療受付時間等を表記し、医療や保健と患者をよりつなぎやすいものにするのが期待される。また、外国人登録されている方の住宅に、民生委員など地域で見守る役割にある人や保健師が、ラーメンマップのように、地域の病院マップを多言語で作成、配布できれば、家庭訪問をできない家庭にも情報を届ける事ができるだろう。

また、実習の際に「帰国した子どもの教育センター校」を訪問した学生からの報告を聞き、私達はもっと、日本以外の国の生活習慣や文化、またどのくらいの人数が日本に居住していて、何をしているのかなどを知る必要があると感じた。学校教育でも、日本の文化を教えるとともに、近隣諸国についての知識を増やし、国際交流を図ることが望まれる。教育を通りこした世代のためにも、『地球の歩き方』の基本情報くらいの内容は冊子にして、公共機関に設置するべきだと思う。

まとめ

私たちは日本在住の外国人の暮らしや現状、そして日本のサポート体制を知る機会が少ない。私はこの演習を通して、やさしい日本語や、日本語でコミュニケーションを取る事の難しさを学んだ。しかし現状では、やさしい日本語の原則を知って日常で活用できる人は少ないと思う。

医療者としての役割がある私には、外国籍の方にも、日本の医療を必要としている人にも、自分の使う日本語が分かりやすく、医療専門用語を使わない形で、どの年代の方にも理解できるものになるような配慮が必要だ。毎日同じ職場で働いていると、自分の所属する場所がスタンダードになってしまう。しかし一歩外に出ると、生育環境や文化背景、使用する単語も、知っているであろう知識も、人によって異なる。

私は精神科で働いている時、患者さんが皆病気を正しく理解していること、薬が飲めることを普通のことだとは全く思わなかった。他の科では当たり前前に病気を受け止め、一人でできる内服もここでは非常に難しく、そこが治療の核になっていると感じていた。自分の居場所を当然だと思わず、日々疑ってかかる事、もっと自分たちに何ができるのかを考えること、また多くの人々が円滑に連携できるよう、自分に考えられる範囲で動くことが大切だと感じた。